

慢性気管支炎は、中高年齢以上の小型種犬によく見られる病気です。知らぬ間に進行し、完全には治りません。のどが詰まったような慢性のせきが特徴で、進行すると気道が小さがり、慢性閉塞性肺疾患を引き起こします。



粕谷 圭治

気管支炎は、小さな気管支が濃い粘液やうみで詰まり、むくんで充血して発症します。長い間患うと、気管支が広がる気管支拡張症が起ります。気道の形が一度変化すると、元には戻りません。さらに進行すると、気管と気管支がつぶれる虚脱という状態になり、症状を悪化させてしまいます。

慢性閉塞性肺疾患は、気道の末端が広範囲にダメージを受けた状態で、息切れの症状が見られます。重い慢性気管支炎と慢性閉塞性肺疾患にかかった犬は、慢性低酸素血症のため赤血球増加症になります。慢性肺高血圧症を引き起こし、さらに右心不全（肺性心）へと進行します。

原因特定は困難

犬の慢性気管支炎の原因は解明されていません。進行期になって初めて見つかると、原因を特定するのが難しいのです。

かすや あいけん びょういん院長
(富山市北新町)

犬の慢性気管支炎



慢性気管支炎の症状を軽くするには去痰剤の吸入が有効。治療には抗炎症剤や気管支拡張剤も用いる

肥満や加齢に注意

慢性気管支炎が最もよく見られるのは、5歳以上の中年以上の年齢の小型犬種、例えばテリアやポードル、コッカースパニエルです。パグ、フレンチブルドッグのような短頭種と呼ばれる犬種や、大型犬種も発症します。たんを吐いたり、せきをしたり

りしますが、たんは普通、のみ込んでしまうので発見するのは困難です。せきは、日中はガチヨウが鳴くような乾いたもので、夜と朝方は湿ったせきになります。慢性気管支炎による気道の変

化は簡単には回復せず、気管支拡張症、気管と気管支の衰弱、肺気腫は治すことができません。この病気がかかった犬は、清潔で涼しい場所でも過ごさせることが重要です。せきの発作を減らすため、ストレスをかけたしり興奮させたりしないようにします。首輪ではなくハーネスを

付けるのが良いでしょう。また、肥満犬は慢性気管支炎にかかりやすいとされています。肥満により、気道の末端はふさがりやすくなります。減量は呼吸と運動を楽にし、心臓や血管系に対するストレスを減らします。減量だけで症状が改善した犬もいます。

日頃から観察を

慢性気管支炎の症状を軽くするには、抗炎症剤、気管支拡張剤、去痰剤の三つを組み合わせて治療します。

抗炎症剤では、「グルココルチコイド」が最も有効です。気管支拡張剤は、気道にたまった分泌物の除去を促してくれます。去痰剤を使用した吸入療法も良い方法です。入院している犬には酸素で満たしたケージも使います。治療後の軽い運動や理学療法は、気管支の粘液を取り除き、気道の末端を広げる手助けをします。せきを鎮める薬も用います。

慢性気管支炎が引き金となって起る病気には、気管支肺感染、慢性閉塞性肺疾患、気管支肺炎、気管支拡張症、肺性心があります。気管支肺感染は、速やかに治療をしなければなりません。気管支肺炎と気管支拡張症は、3〜6カ月ごとに検査しましょう。肺性心は、重い気管支肺炎を伴った慢性気管支炎が進むと起こります。命に関わる重症になるので、注意が必要です。中・高齢期になると、体調は生活習慣や季節の変化に左右されます。日頃からよく観察し、早く病気に気付いてあげましょう。

◇ 次回は2月5日に掲載します。